

読譜のための音感と唱法の問題について〔1〕

——〈固定ド〉と〈移動ド〉の問題を根底に——

古 田 庄 平*

(平成3年2月28日受理)

Auditory-sense and Solfeggio for Score-reading in Music Education

——〈Fixed-Doh〉 and 〈Movable-Doh〉 in Music Education——

Shyohei FURUTA*

(Received February 28, 1991)

はじめに

この「読譜のための音感と唱法の問題」は、明治以来今日まで、何度となく音楽教育界において取り上げられ議論されてきた問題であるが、今日に至ってもなお議論百出して未だに明確な解答が得られていない。そのため、学校教育現場における音楽科の学習指導において、教師はどのように読譜の指導を行なえばよいのか途方に暮れており、読譜の指導をほとんど行なっていないようである。したがって、教員養成大学・学部・小学校教員養成課程の学生のほとんどは、自分の力で新曲の楽譜を視唱することができない。

小学校学習指導要領の第2章第6節「音楽」の表現の第1・2学年では「階名で模唱したり暗唱したりすること。」第3学年では「ハ長調」第4学年では「ハ長調及びイ短調」第5学年では「(ハ長調及びイ短調に)ヘ長調」第6学年では「(ハ長調及びイ短調に)ヘ長調及びニ短調の旋律を視唱したり視奏したりすること。」と示されている。また、第4章「指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い」には「歌唱の指導における階名唱については、移動ド唱法を原則とすること。」と示されており、更に、小学校指導書(音楽編)には「階名唱には移動ド唱法と固定ド唱法とがありそれぞれ特色をもっている。固定ド唱法は絶対音感を身に付けさせるなどの利点をもっているが、無理なく一人でも多くの児童に視唱力を身に付けさせ、音の相対的な感覚や調性感を養うためには移動ド唱法をとることが適切である。なお、器楽の指導においては、固定ド唱法的に処理し、記号としての♯や♭は臨時記号としてとらえさせていくのが効果的な場合もある。」というように説明がなされている。しかし、この説明では「固定ド唱法は絶対音感を身に付けさせるためならば利点があるが、視唱力を身に付けさせたり、音の相対的な感覚や調性感を養うためには利点がない」というように解釈することもできる。

*長崎大学教育学部音楽科教室

ところが、最近では、幼少の頃より長期間にわたり家庭や音楽教室などにおいてピアノの学習や読譜指導を受けてきた児童の中には、〈固定ド〉という特殊な（つまり、平均律的ピアノ音感というような）音感が定着してしまっている者もあり、そのような児童は、読譜する場合にも〈固定ド唱法〉という特殊な唱法（後で詳しく説明する）によって、巧みに視唱することができるようになっている。また、最近の音楽学校の学生や演奏家の中にも〈固定ド〉音感や〈固定ド唱法〉によって読譜や聴音を行なう者が多くなってきていることも事実である。

現に、10数年ほど前には、長崎大学教育学部音楽科（中学校課程）の受験生が30数名いた中で、新曲やコールユーブンゲンを移動ド唱法で歌った者がまだ数名いたが、その後、年々減少の途をたどってきており、本年（平成3年度）などは、受験生が70数名いたにもかかわらず、新曲やコールユーブンゲンを移動ド唱法で歌った者は只の1名であった。

またさらに、長崎大学教育学部音楽科の中学校課程と小学校課程の合同による、40数名の合唱授業の中で〈移動ド〉音感を定着させていて、移動ド唱法で読譜できる者は、筆者を含めても2～3名しかおらず、それらの学生たち（筆者を含め）は、その授業で取り扱う合唱曲の視唱を（ピアノの補助なしで）移動ド唱法で歌うことはほとんど不可能にちかい状態である。ところが、それ以外の学生は、ピアノの補助を借りないで、固定ド唱法によって殆どの曲を歌いこなしてしまうのである。

以上、述べてきたことは一部の例に過ぎないので、このことをもって「移動ド唱法より固定ド唱法の方が優れており、より有効な視唱法である。」と断言したり、「移動ド唱法が衰退の途を辿っている。」というように断言することは、やや早計であるように感じられるけれども、しかし、大学生も筆者（〈移動ド〉音感と移動ド唱法）も経験してきたことであるが、「最近の転調の多い合唱曲を、即刻その場で移動ド唱法により視唱しようとするには、極めて至難な技である。」というようなことが分かってきた。そこで、一時的な対応策の一つとしては、「それらの曲を予め分析しておく準備期間がどうしても必要である。」といったようなことも考えている。

そこで、このような従来から学校の音楽教育で指導することになっている〈移動ド〉音感や〈移動ド唱法〉の問題と、ピアノ学習者の急増による〈固定ド〉音感と固定ド唱法の問題について筆者の考えを述べることにしたい。

I. 〈固定ド〉音感と固定ド唱法の問題について

(1) ピアノ音感〈固定ド〉と固定ド唱法の増加

〈固定ド〉に似たような音感は、「絶対音感」という名称で一時期盛んに研究され実践されたことがあった。そのひとつの例は、昭和12年頃から園田清秀や笈田光吉らによって行なわれた「絶対的聴覚訓練」というものである。特に、笈田が園田の後を継いで実践を行なった「絶対音感を基調とせる和音教育」は当時の音楽教育界に一大センセーションを巻き起こしたのであった。さらにそれは、当時大阪府堺市の小学校の訓導であった佐藤吉五郎によって受け継がれたが、彼はそれを昭和16年頃から「和音感教育」という形で堺市の小学校で行なうとともに、それが当時一部の軍人に認められ、国防上必要という理由から「雑音判別感覚の養成」ということで、彼は一時軍部に利用されたこともあった。そのようなこともあって、戦後わが国では、絶対音感というものに対する研究や訓練は影をひそ

めてしまったようである。¹⁾

しかし、そのような音感は、前述したように特殊な「ピアノ音感」といったようなものではないかと筆者は考えている。つまりそれは、ピアノの音を聴くと、そのピアノの鍵盤の名前（あるいはドレミ）が鳴り響くといったような感覚で、聴覚の認知（あるいは判別）能力が最もよく発達するといわれる幼児期から児童期（2・3歳から7・8歳頃）にかけて、ピアノを弾くという学習を長期間続けると、殆どの児童に自然に陶冶される「後天的な感覚」のようなものであるらしい。

ところが、近年特にわが国は異常なほどの経済成長をなし遂げ、全国の小・中学校はもとより、子どもを持つ家庭の10軒に1軒は、ピアノやオルガンなどの楽器を買い備えているといわれている。そのため、前述したような「ピアノ音感」を定着させた子どもたちが年々増加しはじめており、やがて氾濫する傾向が感じられてきている。

そこで、この項では、そのような特殊な「ピアノ音感〈固定ド〉」や「固定ド唱法」について分析的な視野から詳しく観察し、考察を加えながら拙論を展開してみたい。

① ピアノ指導者の音感と唱法の影響

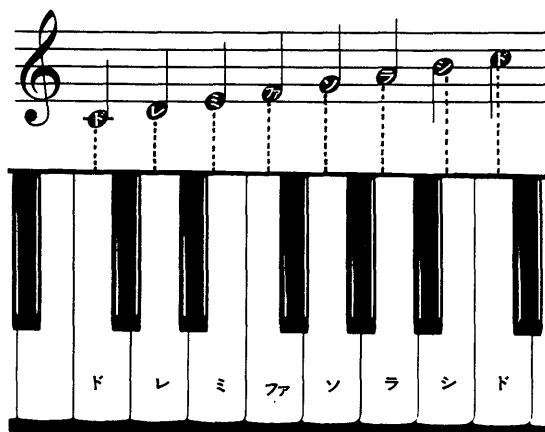
我が国のピアノ指導者が、初めてピアノの学習を始めようという学習者に対して最も多く用いられている初歩的な教則本は「バイエル」という教則本である。それを見ると、最初の第1曲目はハ長調の曲であるが、2曲目はト長調の曲である。ところが、生徒用の楽譜は調号のないハ長調の楽譜で記載されており、このような曲は、5, 6, 7番にもあり、さらに、32, 33, 34, 38, 39, 40, 及び61, 63, 64, 68, 69番も全てト長調の曲であるが、調号のないハ長調の楽譜で記載されている。バイエルはこのような楽譜の記載の方法によって、学習者に一体どういうことを教えようと意図していたのであろうか、その真意が知りたいものである。（バイエルは多分、69番までは「ハ長調読み」つまり〈固定ド唱法〉で指導することを考えていたのではないかと筆者は推察する。）したがって、このような楽譜で書かれているト長調の曲を指導する場合、指導者が用いるソルフェージュ（唱法）が、その学習者のソルフェージュ（唱法）を決定することにもなり、また、その学習者の「音感や唱法」をも大きく左右する重大な影響力を有しているということにもなるのである。

また、次のト長調の音階練習曲や71, 72, 74番などの曲は、ト長調の楽譜で記載されており、さらに、そのすぐ後のニ長調の音階練習及び75番の曲はニ長調の楽譜で記載されている。したがって、そのような曲に移行する場合の指導者のソルフェージュ方法が、学習者の音感や唱法を無意識の内に、〈固定ド〉や〈移動ド〉どちらかに大きく左右し、決定づけてしまうので、指導者は音感や唱法について充分研究し、正しい方法で指導を行なわなければならない。

② ハ長調の音感と固定ド唱法

我が国の音楽教育界（特に近年のピアノ音楽教育界）では、明治以来、我が国で階名として用いられてきた「ドレミファソラシ」という7個の名称を、「ハ長調の音階音固有の名称〈音名〉」のようにピアノの鍵盤に固定化シラベリングすることによって、ハ長調以外の場合にも、ハ長調の音階名のまま使うという方法が、最近盛んに用いられるようになってきた。これが「固定ド唱法」（あるいは「ハ長調読み」）と呼ばれる唱法である。

〈音階と鍵盤図1〉



この「固定ド唱法」は、ハ長調の音階のみに限定して考えた場合、移動ド唱法のハ長調の階名と全く同じなので、移動ド唱法と同属の「階名唱の一種である」と考えることもできる。²⁾ところが、ヘ長調やト長調の楽譜をピアノで演奏したり歌ったりする場合になっても、この「固定ド唱法」はハ長調の7個の階名をそのままピアノの鍵盤に「音名」のように固定したまま歌っていくという唱法である。したがって、この唱法は「音名唱法の一環である」というように考えることもできる。しかし、我が国の音名は「ハニホヘトイロ」と決められており、これは明治以来今日まで一度も変更されたことはない。したがって、我が国の音名唱法といえ、第二次世界大戦当時使用されたことのある「イロハ音名唱法」しかないということになる。(フランスやイタリアのようにドレミ……を我が国でも「音名」として認めれば別であるが。)

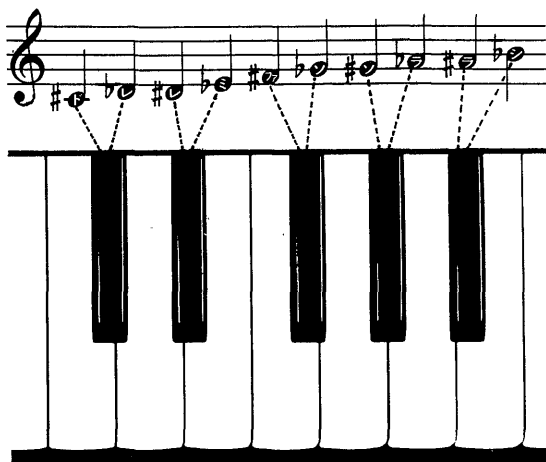
また、この唱法は、一方ではドレミ……を音名のように使いながら、他方ではハ長調やイ短調というように、2種類の音名として使うのは混乱を招くだけではなく、矛盾しており、これは全く誤りであるというような意見もある。³⁾

しかし、今日の我が国に急激に増加してきたピアノ教室の教師やピアノの個人教師たちについて幼児期から長期間にわたり指導を受け、すでに「固定ド唱法」や絶対音感のような音感(筆者はそれを「ハ長調(ピアノ)音感」という)などが陶冶されてしまっている児童・生徒たちに対して、1週間に2時間ばかりの音楽の授業の中で、それも、1年生から4年生まで「ハ長調の学習」をした後、5年生になって初めて「ヘ長調」の視唱を「移動ド唱法」指導を始めたのでは、現実問題として、とても実践に役立つような読譜力を陶冶することは不可能にちかいといわざるを得ないだろう。

③ 唱法の複雑化と簡便化

また、この固定ド唱法の場合、ハ長調以外の音階や旋律の中の派生音の名称は、一個の派生音に対して、 \sharp 系の旋律の場合と \flat 系の旋律の場合とによって、2種類の異なる名称(同音異名)が着けられることになっている。〈音階と鍵盤図2〉したがって、名称数が多くなり「複雑化」するとともに、視唱する際に混乱を来すのではないかと危惧されるが、実際に歌う場合には、その音の幹音の名称をそのまま用いることにしている。つまり、ド

〈音階と鍵盤図2〉



♯の場合はその幹音の名称と同じ「ド」という名称で歌い、レ♭の場合は「レ」と歌うようにしている。さらに、その幹音と派生音との音高の区別は、その幹音と同じ音名を唱えながら、感覚的に半音ずらして歌うという方法を用いることにしている。この方法は技術的に割合簡単なので実用的である。

このように、「音名数を簡便化」することによって、この固定ド唱法は結果的には7音名しか使用しないということになるので、割合簡単に短期間で充分取得でき、実践に役立てることが出来る。したがって、未発達段階（低年齢層）の学習者にも抵抗が少なく、学習の導入に適していると考えられる。

そこで筆者は、小学校と中学校における読譜のための唱法はこの「固定ド唱法」を用いることを推奨したい。また、「移動ド唱法」は中学校から、音階理論と和声学の読譜の手段として学習を始めるべきであると考えている。（これについては「移動ド唱法」の項で詳述する。）

④ 音感を伴った視唱法の陶冶

前項で筆者は、固定ド唱法を用いて容易に音感を陶冶することができ、安易に視唱ができるようになるかのように述べたが、それは、一週間にたった2時間しか行なわれないような学校教育の音楽の授業の中だけでは到底無理な話であって、学校以外の専門教育の学習もあつての話である。したがって、学校教育の音楽の授業内においてのみ陶冶することを想定するならば、その学習過程の進度を充分考慮し、苛酷な学習にならないように充分配慮することが肝要である。また、この音感や唱法を陶冶するということは、指導者側からすれば学習の目的として考えることはできようが、学習者側に立って考えれば、それはあくまでも「音楽を学習するための手段の習得にすぎない」ということになるので、指導者はその点を常に充分認識していなければならない。

さてこの項では、音感を伴った唱法の陶冶の方法について述べるのであるが、最初、つまり、初歩的な段階の学習者に対する音感と唱法の陶冶の方法は、可能な限りピッチの正確なピアノによって音を与えながら、その楽譜の音符の名称〈音名〉を視覚的に唱える方法を回数多く持つことである。

また、初歩的な段階の学習者にとっては、まず、視覚的な反射神経の敏捷性を促進させ

ることを考慮する必要があると考えられる。それには、楽譜の音符や休符を正確に読み取るための集中力を養うことが大切である。しかし、そのことに意を取られ、ただ夢中になってお経を棒読みするような「音名素読」という視唱の練習は、全く「百害あって一分の利益も無い」といった最も愚かな学習の方法であると言わざるを得ないのである。

したがって、音楽を学習するために最も有効な視唱法を獲得させるためには「音感を伴った視唱法」を習得させることである。それはあくまでも、初歩的な段階の学習者に対しては、可能な限りピアノなどの楽器による正確な音程の援助が必要であるということになるのである。

さらにその一方で、音の聴き取り(聴音)の訓練が平行して行なわれることは唱法にとってもより効果的な学習方法である。それは音感をより速やかに陶冶する極めて重要な学習の一つであるからなのである。また、聴音能力が高ければ高い程、音感が優れているということにもなり、より確かな音程を歌い出すことができる、つまり、より正確な音程で歌唱することができるということに繋がるからである。そして指導者は、どの学習段階の途中でであろうとも、その視唱法や聴音力を実際の歌唱教材の学習に生かす場を設定してやることを常に忘れないように心がけていなければならない。

しかし、このような初歩的な段階では、音感や唱法はまだ完全に定着しているわけではないので、視唱の実践などにおいて、若干の不安定さが感じられるのは止むを得ないことであろう。例えば、視唱を行なっていく途中において、至る所で音程の間違いや音名の読み違いを起したり、全体的に音程が下がったり、あるいは不安定になるようなことは度々起こり得ることであり予想されることである。まして、ハ長調以外の旋律としてのフレーズ感や終止感などを考慮して視唱するなどというようなことは、不可能に近いことだと考えておくべきだろう。

⑤ ♭・＃の音感と唱法の陶冶

ところで、学習者は、固定ド唱法によるハ長調の基礎的な学習にある程度慣れて親しんできた段階から、固定ド唱法の第二段階の学習である「半音程の音感と唱法」の陶冶のための読譜練習の段階に学習を進める必要がある。この学習は③の項でも述べたように、固定ド唱法の視唱練習の中でも最も大切な学習課程の一つになっている。

まずそれには、クラマティック(半音階)の歌唱練習を行なうということも考えられるが、この練習はともすると機械的な練習に陥りやすく、あまりにも専門的な練習方法なので初歩的な段階の学習者には不適であると思われる。そこで、学習指導要領にも示されているように、⁴⁾ ♭一つかあるいは ♯一つのヘ長調かト長調の簡単なリズムによって作られている歌唱教材を用いて視唱練習を行なうのが最も適していると思われる。

この練習で特に注意することは、ヘ長調の旋律の場合であれば、「ファソラ ♭ シド」という音階の「ラ→ ♭ シ」と「 ♭ シ→ド」の音程と、その逆の「ド→ ♭ シ」と「 ♭ シ→ラ」の音程の練習を充分行なうことと、ト長調の旋律の場合であれば、「レミ ♯ ファソ」という音階の「ミ→ ♯ ファ」と「 ♯ ファ→ソ」の音程と、その逆の「ソ→ ♯ ファ」と「 ♯ ファ→ミ」の音程の練習を充分行なうことである。その場合、 ♭ や ♯ の音を歌う場合にはピアノでしっかり援助してやるのが肝要である。

⑥ 調性感（終止感）を加味した視唱法の陶冶

へ長調やト長調の旋律の視唱練習の段階で最も重要なことは、調性感（終止感）を加味した視唱法を陶冶することである。この問題は、固定ド唱法でハ長調以外の旋律を視唱する場合に最も注意を必要とするところであり、これを陶冶することは極めて難しいことだといわれている。しかし、この問題が、固定ド唱法の弱点の一つとして最も非難を浴びる点でもあるので、固定ド唱法で視唱する者はどうしてもこれを習得しなければならない。

それはどういうことかといえば、固定ド唱法でハ長調以外の旋律を視唱すると、その旋律の調性感（終止感）が無く、非音楽的に聞こえるということである。言い換えれば、その旋律の一音ずつが意味無く単独に孤立した状態で聞こえ、機械的で無味乾燥な旋律に聞こえるということなのである。これは、つまり、ハ長調の調性感（終止感）が強く残留しているためである。したがって、この難関を速やかに乗り越えるためには、固定ド唱法によりハ長調以外の旋律をより多く視唱することである。さらにその際、ハーモニーの伴奏が付けられれば、その調性感（終止感）の陶冶に対して側面的に強力な援助を与えることになり極めて有効である。元々人間の聴覚に音感が陶冶される過程は、シーショア(1938)のいうように、音楽的能力の獲得過程によく似ており、後天的に獲得されるもののようである。そこで、このような調性感（終止感）を陶冶する学習と、それに平行して音楽的能力が同時に獲得できる教材として、ジュゼッペ・コンコーネ作曲の「中声のための50番練習曲」⁹⁾を、その美しいピアノ伴奏に乗って、固定ド唱法で歌わせることを推奨しておきたい。

〈註及び参考文献〉

〔註1〕 拙論「我が国の音楽教育における読譜の歴史的な変遷について(Ⅲ)」P.60～63 長崎大学教育学部教科教育学研究報告 第12号 1988 参照

〔註2〕 「小学校指導書（音楽編）」文部省 P.98 2－(1)の解説で「階名唱には移動ド唱法と固定ド唱法とがあり……」と説明がなされている。平成元年6月発行

〔註3〕 東川清一「退け、暗き影『固定ド』よ」P.5 昭和58年6月 音楽之友社

〔註4〕 「小学校学習指導要領」第2章各教科 第6節音楽 第5学年 A表現 (1)－イ「へ長調の旋律を視唱したり視奏したりすること。」としめされている。ちなみに、3年はハ長調、4年はハ長調とイ短調、6年はへ長調とニ短調の視唱・視奏をすることとなっている。

〔註5〕 ジュゼッペ・コンコーネ作曲の「中声のための50番練習曲」は歌唱の基礎的練習教材のひとつとして、わが国では高く評価されており、特に美しい機能と声によるピアノ伴奏を伴った旋律は、音楽的な読譜練習にも最も適した教材であるといえる。初歩の学習者は固定ド唱法で学習し、専門的な学習者は移動ド唱法で学習することが望ましい。